Title	聖学院大学総合研究所の目ざすもの
Author(s)	窪寺，俊之
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.22-No.1, 2012.9 : 1-1
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3993
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

巻頭言

聖学院大学総合研究所の目ざすもの

昨年起きた3.11の東日本大震災、それに続く津波による三陸沿岸の壊滅的被害、また原子力発電所の事故は、多くの悲しみと痛みをもたらしました。一年経った今でも津波で壊された町は残骸の山です。原発被害を受けた人々は住み慣れた家に帰れずにいます。多くの人が未だに仮設生活を強いられ仕事もなく、将来に不安を抱えながら過ごしています。政治への不信、国家への怒り、人々と切り離された孤独感、失ったものの大きさに深い哀しみを持ちながら、将来への展望が見えないままに多くの被災者が不安と怒りの日々を過ごしています。

既存の政治、経済、教育、社会、学問に反省と新しい道を模索する動きが出ています。既存の価値観やシステムでは今回のような事態には、人々の生活を支え切れないことを知らされました。政治は党派や政治家の利害を優先して、被災者を助けてはいません。財政援助を受けようとすると、複雑な書類を求められます。被災した人にはそんな時間も労力もありません。もっと被災者に親身になる政治家はいないのでしょうか。もっと迅速に援助を受けられる社会システムはないのでしょうか。だれでもそう思っています。

それだけではありません。物質文化に汚染された私達は、電気を無駄に使っていなかったでしょうか。食べ物を捨てたりしていなかったでしょうか。また自分の欲望だけを満たそうとしていなかったでしょうか。弱い人や病む人を自分とは関係のない人と見ていなかったでしょうか。東日本大地震、津波、原子力発電所事故は、政治、経済、教育、医療、家庭の在り方を始め、私達自身の生き方を問い直すことを求めています。

聖学院大学総合研究所、大学院、大学学部全体が、その知性と頭脳を集めて新しい社会の在り方、私達自身の生き方、社会の未来像を発信する使命を負っていると思います。今こそ強靭で明晰な知性で社会の難問題に果敢に立ち向かわなくてはならないでしょう。また、改革にともなう困難や痛みを引き受けるだけの勇気が求められるでしょう。それには知性とともに真の信仰が求められます。新たなるものを創造する神様を信じる信仰が求められます。この信仰に土台を起きながら聖学院大学だからこそできる学問的研究と真の教育を行なうことが神様から与えられた私達の使命だと示されます。

聖学院大学大学院人間福祉学研究科長　窪寺　俊之